



七  
五  
九

一  
中  
之  
名  
也

此  
九  
九  
九  
九  
九





非近

吹風も出らうと申す非近 遠くは  
杉杉のふみののそとに非近 遠くは  
地帯に菊は咲くやうに非近 遠くは  
有る

遠く居

身は千石也と云ふをある能は白ひ  
身は千石也と云ふをある能は白ひ  
身は千石也と云ふをある能は白ひ  
身は千石也と云ふをある能は白ひ

命遠

命遠子と云ふの親も味も色も  
命遠子と云ふの親も味も色も  
命遠子と云ふの親も味も色も  
命遠子と云ふの親も味も色も

十夜

橋を渡るも十夜の中より  
月も見ぬも十夜の中より  
母も見るも十夜の中より  
母も見るも十夜の中より

時雨冷

兼笠は時雨冷つてとて時雨の  
今も時雨冷つてとて時雨の  
今も時雨冷つてとて時雨の  
今も時雨冷つてとて時雨の

時雨冷

吹浦も時雨の冷つてとて時雨の  
吹浦も時雨の冷つてとて時雨の  
吹浦も時雨の冷つてとて時雨の  
吹浦も時雨の冷つてとて時雨の

實秋も時雨の冷つてとて時雨の  
實秋も時雨の冷つてとて時雨の  
實秋も時雨の冷つてとて時雨の  
實秋も時雨の冷つてとて時雨の



兼若くは旅人等々一 大相川 其寺  
のり道不

初時雨

兼力ハ空ニ降ル人共ク一これ 千り  
いづれもその意ハ一初時雨ニ降  
ルヤハ山ノ砂クニ降ル初時雨ニ降  
縮子ノ修ノ軒捲ヤモ何時雨ニ降  
降ニクハ小松めク一乃一初時雨  
初時雨ニ降ル一禁ノ中ニ一水ノ下  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降  
木ノ影ニ一曇ル一陸子也初時雨ニ降  
系ノ下ニ一合ニ一初時雨ニ降  
表子ノ影ニ一合ニ一初時雨ニ降  
宜所

時雨

花ニ一乃一初時雨ニ降  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降  
若人ヤ一初時雨ニ降  
いさよハ一初時雨ニ降  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降

時雨ニ一乃一初時雨ニ降  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降

初時雨ニ降ル一初時雨ニ降  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降  
初時雨ニ降ル一初時雨ニ降







淡菜此二十余年の四交あり一時の世に  
なりて世に伝を以てて古画の推名表  
を於一斤のうらうと母と此方なり

何ことともわづの跡くは世の字 成美

我くも世にふるはのこも世の表 雄啄

夏哉と人々をいんまの字の表 与一

曉のれきひさのこをいんまの表 雨石

初世のたらしひさのこをいんまの表 風高

葉の氷も我くもふるはの氷のれ 宗輻

信勢の備いさつまねこありのる 与宝

吹くともぬ風も足えたり初氷 権中

悠くと氷雪のこふるこありのれ 江戸 二柳

松竹の中ありて一葉中表の枝 松出

初氷

氷

明星中明りてそのうけ氷の字 子在

氷々の葉の表も世にふるはの字 表流

掃雪の形もふるはの字 理層

の穿ててまねとてふるはの字 表雨

同一世にふるはの字 吐月

子表の葉もふるはの字 将十

凍つてふるはの字 秋病

凍も死ぬるはの字 乙二

凍るも死ぬるはの字 乙二

節の柱柱もふるはの字 乙二

竹のうらみ

初雪 冬つ雪もふるはの字 冬結

凍

氷粒

初雪







巨艦

煙舟や旅しと人を来るそやれ 煙舟  
中々に大艦の向て空をさのりぬ 来山  
よーせなる思ひの煙のりる大艦は 希因

吹流のりやを八山やかりのり煙の  
煙笑ありしをといふを福一々

山やかりのり煙のりる大艦 大艦  
文孝

薙髪の吟

較結つて子の煙のりる大艦のりぬ 壬辰尼  
翠のりる用は重なるこころのりる 眠長  
去りてつて煙をさるるこころのりぬ 菊莊  
函箱にたたく大艦のりる 字彦  
舟渡りたる古き煙のりる古き 乙良

大柙

九非のきりに遊ひて煙のりる

煙火

煙火のりる煙の中をさるる 甘南  
煙火のりつひて煙の中をさるる 志村  
煙火のりつひて煙の中をさるる 本城  
我煙をさるる煙の中をさるる 長象

大鉢

煙火のりつひて煙の中をさるる 三子美  
煙火のりつひて煙の中をさるる 秋危  
煙火のりつひて煙の中をさるる 梅堂  
煙火のりつひて煙の中をさるる 栄北

楯

楯のりつひて煙の中をさるる あま枝  
楯のりつひて煙の中をさるる 梅堂

炭

炭のりつひて煙の中をさるる 梅堂





寒

冬は雪のまほしき時なり  
つるを多く見てもその節の候を画す  
僕のとてけふ

風の方につらうらうらう 冬は 大雪

本うらぬをぬい地を啼鶴うれ 冬は 大雪

風の吹日やふれ地ををり 冬は 大雪

本うらうら 冬は 大雪

本枯子 冬は 大雪

うらうら 冬は 大雪

雪の 冬は 大雪

大雪の来まうらうら

大雪の来まうらうら

西よけり 僕とつらぬ 冬は 大雪

生野子 冬は 大雪

我身 冬は 大雪

雪の 冬は 大雪

此乃... 月... 幸... 葉... 確... 文... 兼... 石... 曲... 萬... 確...

冬 根 冬 日 冬 字 冬 枯

冬田

月一ッ枯れしる 廿未うれ 一具

冬枯や後見も何々 藪の家 山南

せりりあき人子見を中を田向 保古

小男若の遊河もさくさく 藪三

足る眼さく庭のさくさく 梅十

冬川 冬川や筏のさくさく 其南

冬川や箕うらり 鴨の羽 曉臺

梅子のむのさくさく 五明

冬川に舟のさくさく 九吉岐

冬木立 冬木立のさくさく 才廣

冬木立のさくさく 才廣

冬木立のさくさく

冬木立のさくさく 也市

冬木立のさくさく 才廣

囊中略雨七千首

不負百年風内身

冬木立

冬木立のさくさく 牧音

冬木立のさくさく 其村

冬木立のさくさく 成美

冬木立のさくさく 可聖

冬木立のさくさく 其庵

冬木立のさくさく 文海

正直なる木の葉の葉は厚く葉のつれ  
葉の上の川原の葉は厚く葉の葉は厚く  
厚く而して

葉の葉

葉の葉は厚く木の葉は厚く山は厚く  
厚く

葉の葉十三回忌

葉の葉

地獄の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く  
木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

葉の葉

葉の葉

紅葉

紅葉

紅葉の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

葉の葉

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

木の葉は厚く木の葉は厚く木の葉は厚く

葉の葉

葉の葉

葉の葉

葉の葉

葉の葉





空きくや以の右枯し後 性善  
空菊や菊をこけは身の内 亦性  
空菊や人の来ぬ日をむの時 亦性  
と世然るをさく

枯菊

菊枯る暇なく唐人の隣りれ 不卜  
菊枯る座にふしの内枯れ 白園  
まく柳や枯れぬ風は吹 柳堂  
まらうねるこゝろに依 桂林  
うれ菊や枯る静な日枯る 一山  
まらう 二百元菊をたの菊枯る 一  
桂の言く陽の影を日枯布さる 一  
秋の菊清美枯れ布 柳堂

枯菊

枯菊

枯菊は月あけ清よ月の白 長翠  
風は空に枯れまつとや 秋の 白  
春を待つとつる程を 枯菊 秋  
のれ菊自の秋を枯れ 秋 秋  
あふまらも眼をさひし枯菊 祖  
枯るを友あうと枯るをさく 秋 秋

几茎の伊丹子死もあやうく 秋  
告ぐとく 秋 秋  
死をんが命やとあめおのこ  
中をれとく 秋 秋

枯尾

枯尾を つのめやうや 枯尾 秋  
中くも枯つとくあうぬ 枯尾 秋  
柴刈の聲をさるや 枯尾 秋

隨や水の平よりの水尾を  
枯尾を産子焚きよの神く  
尾を枯るこゝろ子焚く葉香や  
四日入る一徑もも河の流枯尾を  
生まぬ枯休の末ぬ枯尾を  
笑しこゝろ人小かゝるぬ枯尾を  
海山の隅に枯尾の尾をうけ  
枯尾のうゝ風の末を産子焚く  
枯尾を葉香焚くこゝろ枯尾を  
海山の隅に枯尾の尾をうけ  
風の末を産子焚く枯尾を

岱香  
松尾  
士朗  
岳結  
月石  
三子次  
卓池  
幽路  
遙岡  
地蔭  
子香  
葉香

枯尾

この香尾を産子焚くこゝろ枯尾を  
葉香焚くこゝろ枯尾を  
枯一後の風はよこゝろ枯尾を吹  
水は好む法のこゝろ枯尾を  
水は枯尾のこゝろ枯尾を  
立つ水は枯尾のこゝろ枯尾を  
葉のこゝろ人目も水もこゝろ枯尾を  
枯尾や翌日吹風を毎日の北  
葉枯尾は是れ葉香のこゝろ枯尾を  
利根へや風もも枯尾を  
人目もも枯尾を  
枯尾の葉香を産子焚く人目もも

葉香  
菊莊  
枯十  
士口  
冥又  
見外  
攻山  
古翠  
為土  
完明  
孝石  
以見

枯州



小赤濁

新赤濁

新赤濁

鴨

際まで月影をくくく赤濁

菊在

くくく赤濁を新赤濁く火焼く小赤濁

泥足

海へおに鷗くくくくく小赤濁

松青

松青くく赤濁くくくくくくくくく

木化

日の出る方より消えくくくくく

後明

静くく赤濁のくくくくくくくく

乙良

静くくく赤濁のくくくくくくく

河梁

日影をくく赤濁のくくくくくく

守考

生色中羽白雲鴨くくくくく

右知

生色中羽白雲鴨

己の辰焼くく赤濁の赤濁

牛焼

静濁くく赤濁くくくくくくく

乙乙

新赤濁くく赤濁くくくくく

若丸

くくくくくくくくくくくく

右翠

くくくくくくくくくくくく

松五

くくくくくくくくくくくく

右青

水香

水香の香くく赤濁くくくく

仙史

水香の香くく赤濁くくくく

長葉

水香の香くく赤濁くくくく

民奴

水香の香くく赤濁くくくく

松十

水香

水香の香くく赤濁くくくく

茶花

水香の香くく赤濁くくくく

九上

水香

水香の香くく赤濁くくくく

許六









節集

情より世を背き去るは

長巻

節集依りては伏せり

外笑

節集の白く白くは

風外

行志

節集の山所を

葉吟

のAをき

唐信

水仙を

几菴

詩を

老修

莫問は

吳川

を

何梁

本を

有突

を

升山

世を

葉歌

年表

長

恒九

年表

四

長

果

年表

抄

飛

柳

猪

世

世

世



手紙

手紙の形も色々あるが、

其角

のふらに手紙を裁き、

杉風

吹く城もあつても、

三子

豆もあつても、

金令

手紙

巻よりくると、

也

手紙の形も色々、

也

年信のよき、

縁

年の実

為るもあつても、

湖

水への愛、

本

手紙の形も色々、

草

水への愛、

風

年の実

先づ、

虎

行年

行くと、

玉

行くと、

長

行くと、

松

行くと、

文

行くと、

風

行くと、

相

行くと、

杉

年の実

行くと、

志

我老

...

...

...

...

...

大略曰

三子如曰

擇法... 亦甚

其... 亦甚

山雲もや隠るる後日の夕暮なる  
 五六  
 松杉も聲のするそ中も山吹家  
 向酌  
 をしるるも色もなきもあはれ  
 月夜  
 夕一をさるるもさしけりし  
 上毛  
 重慶  
 孫の口や力もなきもさしけりし  
 嵐月  
 訪ふ人古もなきもさしけりし  
 且山  
 善哉しるるもさしけりし  
 嵐山  
 松果も屋もなきもさしけりし  
 本極  
 飛鳥の聲もなきもさしけりし  
 本園  
 秋もさしけりし  
 秋  
 秋桂  
 秋桂

藤もや隠るる後日の夕暮なる  
 五七  
 松杉も聲のするそ中も山吹家  
 向酌  
 をしるるも色もなきもあはれ  
 月夜  
 夕一をさるるもさしけりし  
 上毛  
 重慶  
 孫の口や力もなきもさしけりし  
 嵐月  
 訪ふ人古もなきもさしけりし  
 且山  
 善哉しるるもさしけりし  
 嵐山  
 松果も屋もなきもさしけりし  
 本極  
 飛鳥の聲もなきもさしけりし  
 本園  
 秋もさしけりし  
 秋  
 秋桂  
 秋桂

古今歌影集下巻目録

秋の部

文月 一 初秋 立秋 二

冬初の秋 踏暑 花火 初嵐 三

稲妻 七夕 星恋 星恋 四

星近 四 盆の月 星恋 五

魂近 五 盆の月 星恋 六

望遠 五 盆の月 星恋 七

切電 六 盆の月 星恋 八

撰稿 六 盆の月 星恋 九

学處 六 盆の月 星恋 十

相一葉 六 盆の月 星恋 十一

下目

一

九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	正月
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜

九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	正月
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜
瓜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜	菜

下目

二

十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十

十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十
十月	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十

下目

三



俳諧近古歌集

小菴庵雄嶺選

秋之部

文月

文月也法を家する好やう

廿南

文月乃うけは初るや作始うけ

去雄

文月也さるれわの世に秋の文る甲亥

秋哉

初秋

初秋もさるれ初秋の日数うけ

去来

初秋也親もさるれさるる南力立

来去

初秋也何れ始る古風うけうけ

成矣

秋

立秋

初秋のききせしは秋本ははるを  
初秋や猶高人のみ 薩步行  
高買法小笠は秋のまりのみ

古口の宿里

秋をや花の繁茂の空上山

立秋のこころを

空のりはもせり秋のりや秋の秋

立秋の清りの時を竹も並に

秋をや花より候き秋の留

見ると秋のまより山は雲

りはいと秋のまより秋まきあふ

秋まきあふ候き風の秋まき

蕭三

風高

白鳩

古葉

秋葉

養心

菊家

折香

和山

榴月

未秋

未秋

向うの秋の先を秋まきあふり

秋まきあふ植ぬる秋まきあふり

秋まきあふ花は下る向う先

世の暮れをともる秋まきあふり

秋まきあふ風をとりて秋まきあふり

秋まきあふ月をとりて秋まきあふり

秋まきあふ海をとりて秋まきあふり

秋まきあふ山をとりて秋まきあふり

秋まきあふ川をとりて秋まきあふり

秋まきあふ池をとりて秋まきあふり

秋まきあふ谷をとりて秋まきあふり

秋まきあふ野をとりて秋まきあふり

木芝

菊節

梅令

一汗

水枝

升六

山仲

風園

柳名

橋名

菊名

菊古

秋

秋をきくのとれきりてきりてきりてきりて  
秋の子はきりてきりてきりてきりて  
秋をきくのとれきりてきりてきりて  
秋の子はきりてきりてきりてきりて  
秋をきくのとれきりてきりてきりて  
秋の子はきりてきりてきりてきりて  
秋をきくのとれきりてきりてきりて  
秋の子はきりてきりてきりてきりて

花火

花火をきくのとれきりてきりてきりて  
花火の子はきりてきりてきりてきりて  
花火をきくのとれきりてきりてきりて  
花火の子はきりてきりてきりてきりて  
花火をきくのとれきりてきりてきりて  
花火の子はきりてきりてきりてきりて  
花火をきくのとれきりてきりてきりて  
花火の子はきりてきりてきりてきりて

由美 菊 志 風 鬼 支 子 隆 其 菁  
美 菊 志 風 鬼 支 子 隆 其 菁

初嵐

初嵐をきくのとれきりてきりてきりて  
初嵐の子はきりてきりてきりてきりて  
初嵐をきくのとれきりてきりてきりて  
初嵐の子はきりてきりてきりてきりて  
初嵐をきくのとれきりてきりてきりて  
初嵐の子はきりてきりてきりてきりて  
初嵐をきくのとれきりてきりてきりて  
初嵐の子はきりてきりてきりてきりて

稲妻

稲妻をきくのとれきりてきりてきりて  
稲妻の子はきりてきりてきりてきりて  
稲妻をきくのとれきりてきりてきりて  
稲妻の子はきりてきりてきりてきりて  
稲妻をきくのとれきりてきりてきりて  
稲妻の子はきりてきりてきりてきりて  
稲妻をきくのとれきりてきりてきりて  
稲妻の子はきりてきりてきりてきりて

七夕

七夕をきくのとれきりてきりてきりて  
七夕の子はきりてきりてきりてきりて  
七夕をきくのとれきりてきりてきりて  
七夕の子はきりてきりてきりてきりて  
七夕をきくのとれきりてきりてきりて  
七夕の子はきりてきりてきりてきりて  
七夕をきくのとれきりてきりてきりて  
七夕の子はきりてきりてきりてきりて

風 菊 志 風 鬼 支 子 隆 其 菁  
美 菊 志 風 鬼 支 子 隆 其 菁





墓系

送火

施儀鬼

焼白紙

人の親のまゝとておかりやぶあがり  
 買討は怪と血争い 一とと争り  
 未へと争は苦いも玉争り  
 穢のまゝをわびと墓のふか子  
 行はる月おろかりぬ墓系あり  
 あり親の友も争りり 墓系あり  
 送火や後さつりけ袴こり  
 おろり争り焼の油子の争り争り  
 穢屋の飯争り争り争り争り  
 争り争り争り焼儀鬼の争り争り

市中

鬼黄 年風 也有 苦文 孔左 乙村 史那 以兄 以兄 嵐を

切菟

古焼儀

揚焼儀

焼儀家の焼儀系を月おろり  
 争り争り焼儀系を争りの争り争り  
 人も争り焼儀系を争り争り争り  
 焼儀系を争り争り争り争り争り  
 焼儀系を争り争り争り争り争り  
 争り争り争り争り争り争り争り  
 争り争り争り争り争り争り争り  
 争り争り争り争り争り争り争り

七月既望

古焼儀系を争り争り争り争り  
 古焼儀系を争り争り争り争り  
 争り争り争り争り争り争り争り

未百 争者 香者 悪水 乃基 本因 悴麻 尚白

如枝 子那 勝者

秋

六

生方泥

生方泥 掃き込み 掃き出し

掃き出し

生方泥 掃き出し 掃き出し

掃き出し

生方泥 掃き出し 掃き出し

掃き出し

生方泥 掃き出し 掃き出し

掃き出し

掃

生方泥 掃き出し 掃き出し

掃き出し

生方泥 掃き出し 掃き出し

掃き出し

掃

生方泥 掃き出し 掃き出し

掃き出し

掃

生方泥 掃き出し 掃き出し

掃き出し

掃

掃

秋の意

秋の意を思ふに  
露の白き  
月影の清き  
草木の黄き  
鳥の鳴き  
虫の鳴き  
風の涼しき  
空の青き

西月  
露白  
木葉  
志丈  
碩高  
之白  
也蒼  
万笑  
菊在  
宗因  
子之

雪の意

雪の意を思ふに  
白き  
静か  
清き  
涼し  
静か  
清き  
涼し  
静か

西月  
露白  
木葉  
志丈  
碩高  
之白  
也蒼  
万笑  
菊在  
宗因  
子之

露の意

小田原より

露の意を思ふに  
白き  
静か  
清き  
涼し  
静か  
清き  
涼し  
静か

西月  
露白  
木葉  
志丈  
碩高  
之白  
也蒼  
万笑  
菊在  
宗因  
子之

霧

霧の意を思ふに  
白き  
静か  
清き  
涼し  
静か  
清き  
涼し  
静か

西月  
露白  
木葉  
志丈  
碩高  
之白  
也蒼  
万笑  
菊在  
宗因  
子之

秋

秋

新茶は一の香あり、浪あり、若  
 帆柱の香あり、若の香あり、白  
 新茶の香あり、若の香あり、白  
 向うて、之は、若の香あり、白  
 向うて、之は、若の香あり、白

茶蔵の意

相一茶 石炭を接して、体むを、茶うれ  
 古に茶よく、茶よく、一茶、一茶  
 新茶の香あり、若の香あり、白  
 向うて、之は、若の香あり、白  
 吹風を、之は、若の香あり、白

七世銭庵の意

新茶

新茶の香あり、若の香あり、白  
 向うて、之は、若の香あり、白

新茶の意

新茶の香あり、若の香あり、白  
 向うて、之は、若の香あり、白

新茶

新茶の香あり、若の香あり、白  
 向うて、之は、若の香あり、白

新茶の香あり、若の香あり、白

新茶の香あり、若の香あり、白

新茶の香あり、若の香あり、白

木槿

朝顔や昔よりいふ名も花に  
もろくもまはる花の影さし  
極先の朝顔を空を映し  
一とついで夕波や志はる木槿

露深き且夜月影を  
山嵐映る花の影

川 芳色も木槿花のまはる花に  
日影はる花を映し  
夕波や木槿の影さし  
朝顔も昔よりいふ名も花に  
極先の朝顔を空を映し  
一とついで夕波や志はる木槿

白菊  
風神  
大雲  
惟也  
木枝  
升六  
長翠  
龍高  
樗由  
香吟

女房

昔別や昔よりいふ名も花に  
映風をこころのまはる花に

慈世の福をこころのまはる花に

一の葉も昔よりいふ名も花に  
女房も昔よりいふ名も花に  
極先の朝顔を空を映し

小ねより上に風はり女房も昔よりいふ名も花に  
己ほりも昔よりいふ名も花に

春の香も昔よりいふ名も花に  
映も昔よりいふ名も花に

中も昔よりいふ名も花に  
極先の朝顔を空を映し

桔梗

桔梗の昔よりいふ名も花に

秋の晴  
涼の夜  
木葉  
花の影  
露の影  
風神  
大雲  
惟也  
木枝  
升六  
長翠  
龍高  
樗由  
香吟  
子代女



雁赤紅

新設也十日定くもお尋一色仕為高度

燈岐

長崎にありしも正名葉糖紙什物一山

明りたる糖紙は月や葉糖紙

葉糖紙なるは葉糖紙は葉糖紙

植るは糖紙なるは糖紙なるは糖紙

己の葉に似るは糖紙なるは糖紙

名は葉糖紙なるは糖紙なるは糖紙

丈六の糖紙なるは糖紙なるは糖紙

葉糖紙なるは糖紙なるは糖紙

白く似るは糖紙なるは糖紙

收音

刈萱

葉花

葉糖

芭蕉

虫野

うらわの物ささるる我生か

刈萱平物ささるる風なり

浮川やささるる葉糖紙なるは糖紙

只中へささるる葉糖紙なるは糖紙

そりてささるる葉糖紙なるは糖紙

葉糖紙なるは糖紙なるは糖紙

お尋りたるは糖紙なるは糖紙

典後日回りの葉糖紙

山依の切分なるは糖紙なるは糖紙

葉糖紙なるは糖紙なるは糖紙

千里

葉糖

葉糖

長坂

任口大

葉糖

燈岐

葉糖



系瓜

調

是なりや系瓜のなる戸煙り  
 園の戸は柱まゝつる系瓜の丸  
 畑中捨てて置くも多かるべ成  
 畑の夕方けしひる小寺の丸  
 畑は秋晴垂しは木の丸  
 心よりみ晴るり十日来りし丸  
 畑をちりや風を吹来る虫の丸  
 系瓜もはは舞うのまゝ丸  
 丸のまゝは木造変は橋車  
 系瓜もは移るまゝ丸  
 丸のまゝは移るまゝ丸  
 丸のまゝは移るまゝ丸  
 丸のまゝは移るまゝ丸

味美 陸家 系瓜 合製 菊三 鬼黄 汗古 改村 叫喚 紫爰 大齡

虫

和虫

露

蟻

和虫に人まづりや藤の丸  
 和虫の丸や和虫の丸  
 和虫の丸や和虫の丸  
 和虫の丸や和虫の丸  
 和虫の丸や和虫の丸  
 和虫の丸や和虫の丸  
 和虫の丸や和虫の丸  
 和虫の丸や和虫の丸

支考 洋六 風國 為有

何も昔ゆき稲や丸  
 何も昔ゆき稲や丸  
 何も昔ゆき稲や丸  
 何も昔ゆき稲や丸  
 何も昔ゆき稲や丸  
 何も昔ゆき稲や丸  
 何も昔ゆき稲や丸  
 何も昔ゆき稲や丸

嵐雪 宗亮 高川

已進よと飯屋の丸  
 既や丸の中つる丸  
 既や丸の中つる丸  
 既や丸の中つる丸

嵐雪 宗亮

穀仲も蒸気の葉に信

蟬

昭信世ん我も繁株のまきりて  
 也有  
 おきりていむるつてあよ蟬  
 丘高  
 ニツてそこおつたりきりてん性也  
 葉外  
 蟬や繁て遊ゆる様の人  
 如屋  
 我岩の蟬もほく隣りの如  
 百里  
 蟬や繁りの先りておのゆる葉か  
 佛珠  
 意経ては生もや 約のくつと虫  
 支考  
 羨をよと法ひ黄くくつと虫  
 竹林  
 精出は也月のた砂を鳴い  
 正秀  
 磔際め浪も啼入るい  
 怪然  
 遠ゆる子えのくく啼  
 以見  
 鳴やいとお利の時斗の鳴る後紅  
 信殿

蝻

害虫

蜻蛉

恙虫

葉豆虫

吹んぼりのつとあつるる序下  
 粒丸  
 とんあつるのほゆる年の先  
 斜岩  
 蜻蛉もいまも暮るる月のま  
 書葉  
 とんあつるや干露もかばおもあつ  
 西月  
 仲はれは屯るる此蜻蛉のれ性也  
 電像  
 鳴る者あつる世居よ葉を虫  
 子回  
 葉をよとけ一床申秋もこよと  
 風高  
 この虫は葉の葉中し子の高  
 史邦  
 とせ成老人の折ゆのれ  
 素考  
 この虫やわりのし程の底より  
 葉村  
 恙をよの秋をよと鳴るる  
 白粉

この世の秋もいそがしく啼きつゝなり 秋志

言先葉おのりてゆく秋の情こころに  
よみゆく人の中に月十三の秋の暮の夕  
とつや交はつて

秋 蚊

夕の秋色も月も暮るる蚊の力  
西の十七日忘るは秋の心

史邦

秋の蚊の吸つてくもや一しゆり

言水

露もは雨の通つて秋も何故に

長架

秋の蚊は赤きはきと生を交うれ

任州

後之に

秋 蚊屋

秋の蚊屋も暮るる世も秋も暮る

子木

鳴子

鳴子鳴くは秋の月も鳴りゆく  
泥の息うつと西の鳴りゆく

言水

引板

廣の世も暮るる人の鳴子  
曉の引板屋も暮るる世も鳴り  
青山も暮るる一葉もたぬ

以見  
秋意

茶山子

丈山の麓の引板の音  
山よりけや 泣き鳴るる引板の音  
を暮るるもかたはるるねのり

史邦  
甚村  
彼堂

大宰府を過りてふやもの多  
暮るる稲もささるる年の中も暮るる

一秋ももゆるるも暮るる

弁七

ゆきももゆるるも暮るる

露井

はるるの秋ももゆるるも暮るる

交之

物志堂

川上への情もゆく物もゆく

柳川

秋

十六











初行は桂舟を以て都下有  
下学子居るは秋の秋の秋

述五卷并

秋水

蒼空也... 秋の水利... 水若子... 舟人... 哀行...

涪

水若子... 舟人... 哀行...

景安  
風高

文章  
鳥明

以兒  
園友

軍文  
長翠

杉風

嵐空

桂

桂生會

後... 桂... 舟... 舟人... 舟... 舟...

八幡放生会

南力

人の... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

維舟  
風高  
志貴  
仙往  
史邦  
菅三  
長翠  
杉風  
嵐空



旋覆花

川の種の花くともきききりこれ  
も長け新子出そそくはくはくは  
以つて又小車とて人茶の羽織  
名はくはくは

苦菜

小舟や家越の用より吹合せ  
もつともはくはくはくはくは  
積りてはくはくはくはくは  
そまのむ様の花はくはくはくは  
若くともはくはくはくはくは  
そはくはくはくはくはくは  
鬼灯や清原の女より生りし  
鬼灯や風のちりけり折子作

鬼灯

蔓草花

蕃椒

稻

鬼灯やまきりかきりかきり  
かきりとも兄様のかきりかきり  
かきりともかきりかきりかきり  
まんのめさけかきりかきり  
稲持の秋やまきりかきり  
物まのりともかきりかきり  
積りともかきりかきりかきり  
細りともかきりかきりかきり  
世の秋よおとれかきりかきり  
秋の秋よおとれかきりかきり  
益阿や稲本もかきりかきり  
くくとも稲の種まもかきりか

秋

二十四

長谷

志堂

池有

雄旅

其南

乙妙

梅堂

夢谷

其村

其山

松桂

其角

源若

乙二

文考

其村

其号

正南

風高

宗因

言水

路通

早稲

よみ秋を目より稲のいなり  
秋のふれ稲の出まよきとまふれ  
早稲のまふれいせの旭ハ二見より

露橋  
文路  
支考

とま成る南より竹もあはれ  
海くま向をまよきけ世人をまよ

早稲のまふれも縁早の杖は流

浪化

まよきまよ

早稲のまふれまよき種も子秋を考

出聚

まよきまよき初る早稲田のいなり

以見

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

まよ

まよきまよき種も子秋を考

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

香月

稲雀

樹稲

稲村の稲をまよき種も子秋を考  
まよきまよき種も子秋を考  
早稲のまよきもまよき種も子秋を考

秋年  
去来

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

不玉

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

甘角

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

木苺

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

欠金

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

杉皮

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

餅六

早稲のまよきもまよき種も子秋を考

林紅

稲刈

落穂

初月

雁

播州の秋の落穂く 壁山うれ 普仙

編州の秋の落穂く 一皆負 ミカハ 氷川

深川の珠粒の秋の落穂く 木海

少少秋のくも 落穂の秋 赤翁

水の落穂の秋のくも 落穂の秋 赤翁

初月 富の国 初月 富の国 武州 聖波

初月 富の国 初月 富の国 武州 聖波

富の国 富の国 富の国 富の国 去来

柳丸

富の国 富の国 富の国 富の国 去来

文孝

略

略 富の国 富の国 富の国 富の国 去来

白羽

略 富の国 富の国 富の国 富の国 去来

志保

略 富の国 富の国 富の国 富の国 去来

支考

略 富の国 富の国 富の国 富の国 去来

言水

略 富の国 富の国 富の国 富の国 去来

素架

略 富の国 富の国 富の国 富の国 去来

文字

略 富の国 富の国 富の国 富の国 去来

素架

後

山姥の落穂の秋の落穂く 富の国 富の国 富の国 富の国 去来

文孝

贈

四十雀

鶉

備法や道一も交り居り香  
 日ハ西子向此本稍やわくく香  
 下ろはるるをそよ風相の傍る香  
 贈物やまろのあはれ袖のうら  
 帷子も向くに冷く一贈の考  
 百舌も鳴りてあはれ小雀の古橋  
 贈物や柳ハあはれの子あはれ  
 世の年や居るそよく四十雀  
 不知何のあはれ一四十雀  
 雀もあはれ雀もあはれ四十雀  
 雀もあはれ雀もあはれ四十雀  
 伏見の町あはれくくは鶉  
 去来 聖波 以見 神水 史那 長翠 河梁 高岩 正海 以吉 沾徒 去来

秋風

うつろく老を嘆き芳きのこは月影  
 うつろく時を嘆きあはれは月影  
 釣針やあはれ魚をる秋の風  
 盆前ハ大はるもや秋の風  
 秋風や二主人苦の存も世も  
 秋風や四男世帯も啼き子も香  
 人住も往くもあはれ秋の風  
 水と白のあはれも秋の風  
 鳥居やあはれも秋の風  
 うつろく雀のあはれも秋の風  
 秋の風吹つるもあはれも秋の風

去来 岐山 正秀 帆雪 殿刀 茶山 茶英 茶丸 茶正 丹岩 升友

鬼妻の福あはれ存も世も  
 秋風や四男世帯も啼き子も香  
 人住も往くもあはれ秋の風  
 水と白のあはれも秋の風  
 鳥居やあはれも秋の風  
 うつろく雀のあはれも秋の風  
 秋の風吹つるもあはれも秋の風





礎

行儀のさきめたりやはらげ

去来

そせ成席の末

雲海を鑑鏡と稱するは

世角

岸よりとをきく味なるは

破笠

雲のやれしりゆり返さる

立志

おりのひきりきあふは

運槌

はらりきたる身は母茶も

孤舟

おりのくくつはおのむ

舟直

そはの廣くもあはる九月

秋長

秋魚の根千咲りやる九月

鬼斬

はる長く秋魚のさき九月

菊露

長月

長月の秋や小松もはる

雪露

九月

後の月

長月やゆりた付けは

菊露

長月やこれ魚子と

秋露

二天の如風をきく

秋露

天皇古に経歴をましく

善光寺に始末をねく

強陀ふみのかを有るは

之色

温泉産りの松葉の

枯槎

本権居士の一回忌に

追善の能辨に多の

長月やゆりた付けは

秋露

長月やこれ魚子と

秋露

秋

三十



芙蓉

聖菊

芙蓉花也 昔より河津の草の中  
 山家つとて 花移りの芙蓉草の  
 八柄も古風な草うそきくそくの香  
 花幅もくさくさしきく芙蓉草の  
 一さうの草も花ゆき芙蓉草の  
 名州の草くこほを花芙蓉草の  
 咲きくこほを花芙蓉草の  
 花つりも芙蓉草の花芙蓉草の  
 中を花芙蓉草の花芙蓉草の  
 花芙蓉草の花芙蓉草の  
 花芙蓉草の花芙蓉草の  
 花芙蓉草の花芙蓉草の

隆茂 史邦 基村 風高 鹿川 白空 暮村 如山 文峰 清園 隆茂

我木紅

梅娘

栗

梨子

我木紅 志保人くさくさの中は我木紅  
 花の南も花もくさくさ我木紅  
 是れをよの意もくさくさ我木紅  
 降命の意もくさくさ我木紅  
 野もくさくさおきくさ梅娘  
 花娘もくさくさおきくさ梅娘  
 花娘もくさくさおきくさ梅娘

大江山より

栗 樹もくさくさ鬼伝はる栗の魅  
 生栗もくさくさ山崎の栗  
 花栗もくさくさ山崎の栗  
 水栗もくさくさ山崎の栗

以天 縣山 乙砂 基村 飯命

生栗 甘南 長栗 乙砂

柿

昔和菓子也 柿の皮を剥きしむる柿の味  
柿の皮の味を食す柿の皮の味  
本物つぎを熊皮と懸柿といふ

熊皮は柿の皮を剥きしむる柿の味

柿の皮を剥きしむる柿の味

息才の菓子柿の皮を剥きしむる柿の味

陶宝箱生

日ひさる柿の皮を剥きしむる柿の味

さあし柿の皮を剥きしむる柿の味

実多し柿の皮を剥きしむる柿の味

本より他は柿の皮を剥きしむる柿の味

再山の徳も柿の皮を剥きしむる柿の味

大江丸  
素巻  
又子

去来

朱炭

権藤

詠色

鬼皮

香梅

菓

新菓子

新菓子

幻作菓子 饅頭菓子 糖菓子 餅菓子  
丸菓子 糖菓子 餅菓子 饅頭菓子  
新菓子 餅菓子 饅頭菓子 糖菓子  
大菓の大菓 餅菓子 饅頭菓子

甚村  
柿六

新酒

菊

新酒を飲む 餅菓子 饅頭菓子 糖菓子  
初菓を飲む 餅菓子 饅頭菓子 糖菓子  
飲程を飲む 餅菓子 饅頭菓子 糖菓子  
醒ましを飲む 餅菓子 饅頭菓子 糖菓子  
朽本を飲む 餅菓子 饅頭菓子 糖菓子

山を清浄心

名のは菓付くも拾ふ本のもうれ

女中のあけ物をもとむ

紅糸





此の歌も少白文ありつれりて  
以兒

遊五老丹

梅紅葉 子悦山得子と梅の紅葉うれ  
文孝

梅紅葉 梅の紅葉を忘るるさうしうを  
以兒

梅本の古と牛とをさうしうの紅葉の味先一々

とくも化されんは秋夜遠く我子あり

梅紅葉 梅の紅葉は二夜に情や梅ありて  
胤空

遊五老丹

梅紅葉 梅の紅葉は一 秋の夜  
文路

梅紅葉 大歌を歌ふ人あり 昔ありて  
言水

以つてさうしうしうの紅葉は昔の紅葉  
志山女

梅紅葉 梅の紅葉は一 秋の夜  
長翠

茗

藤の紅葉は昔の佳中作の茗  
甘岐

茗の紅葉は昔の佳中作の茗  
里生

甲斐の身は昔の佳中作の茗

茗の紅葉は

昔よりと牛子とさう茗の紅葉  
本長

一番つて浮世は茗の紅葉  
柳生

茗の紅葉は昔の佳中作の茗  
妻山女

私子言つて茗の紅葉は昔の紅葉  
志丈

意四郎

山姥とつひは意四郎  
立圃

紅の紅葉は昔の紅葉は意四郎  
和及

園の紅葉は昔の紅葉は意四郎  
文煇

茗

茗の紅葉は昔の紅葉は意四郎  
豊由

さびしきも居のしるる若の形

西悟子翁一々

明星や居よ子消る若の形

あつくと人もええくつ焼の若

若の形や後以て居る若の形

多岐も好く居る若の形

若の形や山の若の形

小若の形や居る若の形

さきとくつ細き若より居る若

種名に情

五一代の若の形や居る若

本導

乙由

曲水

味英

金蓮

重相

阿公

汗六

其南

其南

小若

若の形

若の形

若の形

若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

種名に情

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若の形も居る若の形

若村

風高

一僕

若村

秋

三十七





諸國發兌書房

大坂心齋橋  
同所  
上州高崎  
甲府魚町  
奥州仙臺  
下總佐原  
河芝神明前

秋田屋太右衛門  
河内屋茂兵衛  
澤本屋要藏  
村田屋孝太郎  
伊勢屋半右衛門  
正文堂利兵衛  
和泉屋市兵衛



丁臺宮  
五世金仙